

現代厦門語の母音体系に関する一研究

朱 新建

目次

0. はじめに

1. 単母音 [i], [e], [a], [ɔ], [o], [u]

2. 重母音 [ui], [ue], [ai], [au], [ia], [ua], [iu], [io], [iau], [uai]

3. 鼻母音 [ɿ], [ɛ̃], [ã], [ɔ̃], [ũ], [äɪ], [ãũ], [ɿã], [oã], [ɪũ], [ɿãũ], [oãɿ]

4. 母音と末子音 ([i], [u]) ([e], [a], [ɔ], [o]) ([m], [n], [ŋ], [p], [t], [k], [ʔ])

5. おわりに

[付表Ⅰ] 厦門語母音分布表

[付表Ⅱ] 厦門語口語・文口語体系表

[付表Ⅲ] 厦門語声調表

・主要参考文献・

羅常培, 1956, 『厦門音系』(科学出版社)

董同和, 1957, 『厦門方言的音韻』(中央研究院歷史研究所集刊29)

袁家驊, 1960, 『漢語方言概要』(文字改革出版社)

詹伯慧, 1981, 『現代漢語方言』(湖北人民出版社)

周長禪, 1995, 『厦門方言詞典』(江蘇教育出版社)

0. はじめに

現代厦門語の母音体系については、本稿では、羅常培1956(以下は羅体系と言う)を中心に、董同和1957、袁家驊1960、詹伯慧1981、周長禪1995(以下はそれぞれ董体系、袁体系、詹体系、周体系と言う)などの先行研究をふまえながら見ていくことにする。

まず、羅体系を下記に挙げる。

a. 陰韻

		a	ɔ	o	e	ai	au
i	iu	ia		io			iau
u	ui	ua			ue	uai	

b. 半鼻韻

		ã (io) ɔ		ẽ *	ai	au
ɿ	iũ	ĩã				ĩau
ʊɿ	ũã				ũai	

c. 陽韻

	am		an		aŋ	ɔ:ŋ
im	iam	in	ian	iəŋ	iaŋ*	ioŋ
		un	uan		uaŋ*	
	ap		at		ak	ɔ:k
ip	iap	it	iet	iək	iak*	ioɿ
	ut		uat			

d. 聲化韻

m	ŋ
---	---

*は常用しない韻母である。(注:原文の語例を省略した)

上記の羅体系の厦門語の母音体系表では、「陰韻」(口母音)は単母音が6個、重母音が10個、「半鼻韻」(鼻母音)は12個、「陽韻」(母音と音節末子音の組み合わせ)は27個、「聲化韻」(鼻音が音節主音)は2個、合計57個である①。

これに対して、羅体系以後の先行研究では、董体系、袁体系、詹体系、周体系を見ると、厦門語の母音体系の記述についてはそれぞれ下記のような相違点が見られる。

1) 単母音 各体系とも6個:

[i] [e] [a] [ɔ] [o] [u]

2) 重母音 各体系とも10個:

[ui] [ue] [ia] [ai] [au] [ua] [io] [iu] [iau] [uai]

3) 鼻母音 羅体系、袁体系、詹体系、周体系とも12個:

[ɿ] [ẽ] [ã] [ɔ] [ʊɿ] [ĩã] [ũã] [ai] [au] [io] [ĩau] [ũai]

董体系は7個:

[ɿ] [ẽ] [ã] [ĩã] [ũã] [io] [ũai]

4) 母音+m 各体系とも3個:

[im] [am] [iam]

5) 母音+n 各体系とも5個:

[in] [an] [un] [ian] [uan]

6) 母音+ŋ 羅体系, 袁体系は6個:

[iəŋ] [aŋ] [ɔŋ] [iaŋ] [ioŋ] [uaŋ]

ただし, 羅体系の[uaŋ]の語例である「權[kuaŋ]」は現在では[kuan]と読むのが一般的である。

董体系, 詹体系, 周体系は5個:

[iŋ] [aŋ] [ɔŋ] [iaŋ] [ioŋ]

7) 母音+p 各体系とも3個:

[ip] [ap] [iap]

8) 母音+t 各体系とも5個:

[it] [at] [ut] [iat] [uat]

ただし, 羅体系では[iat]を[iet], 董体系では[iet]と表記している。

9) 母音+k 各体系とも5個:

[ik] [ak] [ɔk] [iak] [io̯k]

ただし, [io̯k]を羅体系では[iɔ̯k]と表記している。

10) 母音+ʔ 羅体系, 袁体系とも記述なし。

董体系は10個:

[iʔ] [eʔ] [aʔ] [oʔ] [uʔ] [uiʔ] [ueʔ] [iaʔ] [uaʔ] [ioʔ]

詹体系は13個:

[iʔ] [eʔ] [aʔ] [oʔ] [uʔ] [ueʔ] [iaʔ] [uaʔ] [ioʔ]

[uiʔ] [auʔ] [iuʔ] [iauʔ]

周体系は15個:

[iʔ] [eʔ] [aʔ] [oʔ] [uʔ] [ueʔ] [iaʔ] [uaʔ] [ioʔ]

[uiʔ] [auʔ] [iuʔ] [iauʔ]

[ɔʔ] [uaiʔ]

11) 鼻母音+ʔ 羅体系, 董体系, 袁体系とも記述なし。

詹体系は8個:

[ɪʔ] [ɛʔ] [aʔ] [ɔʔ] [ɪaʔ] [aɔʔ] [uaʔ] [ɪaɔʔ]

周体系は11個:

[ɪʔ] [ɛʔ] [aʔ] [ɔʔ] [ɪaʔ] [aɔʔ] [ɪaɔʔ]

[œʔ] [uɑɪʔ] [ɱʔ] [ɲʔ]

12) 音節主音 各体系とも2個:

[ɿ] [ʊ]

従って、上記のとおり、廈門語の母音体系については羅体系の記述では57個、董体系では62個、袁体系では羅体系と同じ57個、詹体系では77個、周体系では最も多く、計82個である。羅体系や董体系と袁体系が少ないのは、いずれも母音と音節末子音の声門閉鎖音の[ʔ]との組み合わせ(詹体系は合計18個、周体系は合計26個)を体系表に入れていないことがわかる。

しかし、上記の先行研究ではいずれも次のような問題点がある。

1) 廈門語の母音体系は口母音の体系とこれに対応する鼻母音の体系がなりたっているが、これは廈門語の母音体系の特徴であり、他の閩南方言には見られない特徴である。これについての体系的な研究は先行研究ではまだ不十分である。

2) 詹体系と周体系では、純口語の、該当する漢字のない音声がいくつかある。これについての分析が不十分である。

3) 羅体系、董体系、袁体系と詹体系、周体系に見られる数の差は主に母音+ʔの場合と鼻母音+ʔの場合に現れるが、この末子音[ʔ]は廈門語の特徴であり、他の閩南方言に例を見ないほど体系が整えている。この声門閉鎖の末子音の[ʔ]についての整理はまだ不十分である。

上記の問題点を念頭におきながら、先行研究の成果をふまえて下記のように廈門語の母音体系を示しておく。なお、便宜のため、基本母音の順番と音節主母音に従って作表し、[]を省略した。

廈門語母音体系表

口母音の体系(57個)										鼻母音の体系(25個)	
i	im	in	iŋ	ip	it	ik	iʔ			ɪ	ɪʔ
ui							uiʔ			ʊɪ	
e							eʔ			ẽ	ẽʔ
ue							ueʔ			ʊẽ	ʊẽʔ
a	am	an	aŋ	ap	at	ak	aʔ			ã	ãʔ
ai										ãi	
au							auʔ			ãu	ãuʔ
ia	iam	ian	iaŋ	iap	iat	iak	iaʔ			ĩã	ĩãʔ
ua	uan			uat			uaʔ			ũã	
iau							iauʔ			ĩãu	ĩãuʔ
uai							uaiʔ			ũãi	ũãiʔ
o		oŋ				ok	oʔ			õ	õʔ

	ioŋ		ioŋ
o			oʔ
io			ioʔ
u	un	ut	uʔ
iu		iuʔ	iŋ
		(ɱ)	ɱʔ)
		(ŋ)	ŋʔ)

(注:ɱ,ɱʔ,ŋ,ŋʔは音節主音として挙げた。)

ところで、現代厦門語には、実際の話し言葉の中ではさらにいわゆる「白讀」と「文讀」の体系が存在していることは先行研究にも指摘されてきた②。「白讀」とは、厦門語話者が日常生活に普通に使われている話し言葉であるが、「白讀」とは現在では北京語の発音に似せたような発音で書き言葉や読書、朗読、ニュースの放送、スピーチなどの、文章のようなものを口に出すときの話し言葉であり、両者ははっきりと使い分けられている。本稿では「白讀」を「口語」と言い、「文讀」を「文口語」と言うことにする③。

勿論、「口語」と「文口語」の使い分けができる厦門語話者は教育を受けた者である。現代の教育を受けた厦門語話者は勿論北京語もわかるので、相手が違えば、同じ厦門語で話すときでも、北京語に近いような発音で話すいわゆる伝統的な「官話習慣」は、方言の多い中国ではの現象である。筆者自身は永州方言話者であり、同じ永州方言でも、郊外の農民との話し方と高校の同窓生との話し方は心得ている。ちなみに、永州人にとっての「官話」は北京語ではなく、湖南省省都の「長沙話」である。長沙訛りで永州方言を話すと、なんか格好いいみたいである。それに、中国の故主席毛澤東は長沙系の湘潭語で一生を通し、また一時に「方言で教育せよ」との「最高指示」も出したぐらいである。したがって、中国では現在でも、北京以外の都会では、テレビなどでは方言放送の番組は勿論、上海、廣州、厦門などの都会のように、北京語のニュース放送後は必ず方言で再放送することになっている。日本のNHKのBSの深夜各国ニュースの番組でも、すでに数年前から北京の中央放送の録画を放送した後、廣州の廣東語放送の録画も放送するようになっている。そして、厦門語の「口語」と「文口語」の体系は、ある意味では日本語の訓読みと音読みに似ているようなものである。

厦門語の「口語」と「文口語」については先行研究ではほとんど口語と文口語の対応を記述したのみであり、文口語生成の主な原因である「官話」(現在では北京語のことである)との比較と対応についての分析はまだ不十分である。先行研究の成果をふまえて、現代厦門語の口語・文口語の対応と体系を付表Ⅱ「現代厦門語口語・文口語体系表」にまとめることができる。そしてそれぞれ以下の各項目で母音の体系と一緒に述べていくことにする。

1. 単母音 [i], [e], [a], [ɔ], [o], [u]

厦門語の口母音は57個の内、単母音が6個である。羅体系では、厦門語の単母音は「大体[a], [ɔ], [o], [e], [i][u]の6個の音素(phoneme)にまとめることができる。しかし、精密な分析では、それぞれの音素の中では主音(principal member)以外にさらに多くの副音(subsidiary members)があり、単純な音値がそれぞれ一個のみではない」と指摘されている④が、その他の先行研究を見ても、各体系とも6個である。

以下は羅体系の記述を中心に厦門語の単母音を見ていく。

[i] [i]は平唇の前舌狭母音である。IPAの[i]ほど狭くなく、やや後寄りである。

[i]については羅説では下記のように記述されている。

[i]には4個の音値がある。単独か鼻母音の[i̯], [i̯ʊ], [i̯ʊ], [ai̯], [u̯ai̯]の中ではNO.1の基本母音[i]に相当する。[i̯]では基本母音[i]よりやや後寄りである。その他のi-類または-i類の中と[im], [ip]では, [tɕ], [tɕʰ], [s]の後の[i]以外に依然として[i]である。その他は緩やかな[i̯]である。そして[in]と[it]ではやや広く且つ緩やかになる傾向がある⑤。

筆者の観察では羅体系の記述とはやや違う。[i]が主音である場合は、舌位はIPAの[i]ほどの狭い音ではなく、寧ろやや広い[i]である。例えば、「伊[i̯]」(彼), 「移動[i̯²⁸ tɕŋ⁶]」(移動)などの[i]はそうであるし、口唇の形も基本母音の[i]ほど左右上下に開かれていない⑥。そして、鼻母音の[i̯], [i̯ʊ], [i̯ʊ], [ai̯], [u̯ai̯]の中の[i̯]は前後の母音の影響で舌位が更に広くなったり、後寄りになったりするため、基本母音[i]に相当するとは考えにくい。むしろ、鼻母音の[i̯]が単独で音節主音をなすときには基本母音[i]よりはやや後寄りではあるが、基本母音[i]に一番近い音である。例えば、「甘珍[kam⁶⁸ tɕi̯]」(美味しい), 「圓仔[i̯²⁸ a⁸]」(団子)などの[i̯]がそうである。董体系では次のように記述されている。

iは音声学のいわゆる『基本母音』の尺度で見ると、ここのiはどれも相当広い音であり、鼻音化の場合は特にそうである。また、人によって程度の差はあるが、iŋ(k)の場合ではiと音節末子音の間に常に[ə]が聞こえる。しかし、iəŋ(k)とiŋ(k)の対立もなければ、他の環境にこの[ə]が観察されないで、[ə]の表記をする必要がない⑦。

袁体系では羅体系とはほぼ似ているが、[iŋ]と[ik]の[i]については、

[i]はさらに広くなり、そして重母音化の傾向が見られるため、各説の表記が iəŋ iök, iŋ ik 或いは eŋ ek のように一致しないわけである。……精密な表記ならば…[iə]…として表記できる。

と記されている⑧。

しかし、董体系や袁体系の[ə]はあくまでもわたり音的なものにすぎず、そして袁体系の[i]の異音としての[iə]の記述は的確ではない。

詹体系では[i]について次のように記述している。

iの音値は一般に基本母音iより緩やかであり、精密な表記は[i]であるべき

であるが、鼻音化の場合のみ基本母音[i]に近くなる。例えば、「卑」[pi]と「邊」

[pĩ],「記」[ki]と「見」[kĩ]とでは、前者の舌位は明らかに後者より広い⑨。

詹体系の記述は厦門語の[i]の実態に合っていると見えよう。

厦門語の[i]はIPAの[i]よりは舌の位置はやや広く、後寄りであるが、日本語の「イ」の母音[i]よりは舌位がやや狭く、前寄りであり、口唇の形も日本語の[i]よりは両口角にひかれている。しかし、北京語の[i]はどの平唇ではない。例えば、北京語の「意義」[i⁴i⁴],「避火梯」[pi⁴xuo³t'i¹]などの[i]は、フランス語の[si]やドイツ語の[bi:ne]の[i]と同じぐらいIPAの[i]に近い音である⑩。

[i]が子音の口蓋化の最も重要な要素である。口蓋化音の場合、舌は硬口蓋へ持ち上げられるため、[i]はやや後寄りとなるが、広母音の[a]に先行されると、[i]の舌位は更に後ろにずれ、中舌の[i]に近い音になる。[i]の後に軟口蓋の[ŋ]などが来る場合も、[i]の舌位が後ろにずれ、[i]と[e]と[i]の三角形の中間にある[ɪ]に近い音になる。ただし、便宜のため、本稿では厦門語のiをすべて[i]と表記する。

一方、北京語の「寺」[sɿ⁴](寺)や「字」[tsɿ⁴](字),「刺」[ts'ɿ⁴](刺)などのように、中舌母音[ɿ]が存在するが、日本語にも「酢」[sɯ]や「津」[tsɯ],「伊豆」[izɯ]などのように中舌母音[ɯ]が存在する。[ɿ]と[ɯ]は聴覚印象では非常に似ている音である。このような中舌の母音[ɿ]と[ɯ]は厦門語には存在しない。

厦門語の[i]の語例を次に挙げる。

語例	伊	[i ¹]	(彼)	個	[in ¹]	(彼ら)
	移動	[i ²⁶ tɔŋ ⁶]	(移動)	日本	[tʰip ⁸⁵ pen ³]	(日本)
	点滴	[tiam ³⁵ ti ⁷ ʔ]	(少し)	熱天	[ɾua ⁸⁵ t'i ¹]	(暑い日)
	塵埃	[iŋ ¹⁵ ia ¹]	(埃)	出去	[ts'ut ⁷⁵ k'i ⁵]	(出て行く)

なお、厦門語の口語と文口語との対応は、他の中国語の方言も同じであるが、口語の体系はいつも一定しており、変化はあっても僅かである。しかし、文口語の体系は常に「官話」に「連動」されるので、「官話」が変われば、文口語の対応も非常に速く変わる。そうでなければ「官話」に対応する文口語の存在する意味がなくなる。例えば、台湾の台湾語放送のテレビ番組では、人名や台湾語にない固有名詞などは台湾の北京語(台湾では国語と言う)で言うのを台北空港で初めて聞いたときは、さすがに驚いたことがある。しかし、考えてみるとわかるが、現代では方言よりも

共通語のほうは遥かに新しい情報の伝達が速いので、台湾語のように、新しい言葉での方言の対応が間に合わなければ、「官話」でも「国語」でも「共通語」でも、方言と交じって話される傾向はますます多く見られるであろう。

一方、「標準話」としての北京語の普及はすでに新中国の前から始まり、新中国の誕生によって大に進められてきたため、厦門語の文口語の体系を見ても、ほとんど現代北京語に対応していることがわかる。以下は厦門語の口語を基準に、音節主音としての[i]の口語・文口語の対応関係を示しておく。

語例	口語	文口語	北京語
地	[te ⁶]	[ti ⁶]	[ti ⁴]
面	[6in ⁶]	[6ian ⁶]	[mian ⁴]
輕	[k'in ¹]	[k'iq ¹]	[tɕiq ¹]
眼	[ɣiq ³]	[ɣan ³]	[ian ³]
肩	[kiq ¹]	[kian ¹]	[tɕian ¹]

[e] [e]は平唇の前舌半狭母音である。IPAの[e]よりやや広く、後寄りである。

[e]について羅体系では下記のように記述されている。

[e]はNO.2の基本母音[e]に相当する。入声音の[iet]は対応する[ian]よりかなり狭くなり、NO.3の基本母音よりもやや狭く、やや後寄りに聞こえる。…しかし、そのまま[e]で表記すると、実際の音声とは掛け離れすぎる。ただ、[e]は[iet]以外では観察されないので、表記としては[e]を保留しているが、[e]の異音とするだけであり、独立の音素としてはたてない⑪。

董体系では次のように記述されている。

eは厦門語の中では、前舌母音ではいわゆる半狭と半広の区別がない。このeは陰聲韻と入聲韻の中では常に半狭と半広の中間に位置し、陽聲韻の中では「半広」である。印刷の便のため、[e]を使わないが、ien(t)は[ian(t)]としてもよい⑫。

袁体系では「[e]がNO.2の基本母音に同じ」としているが、詹体系では「eの舌位は基本母音[e]より広く、[E]に近い」としている。

上記のように先行研究の記述は一致していないが、筆者の観察は董体系に近い。すなわち、厦門語の[e]は基本母音のNO.2とNO.3のほぼ中間、董体系の半狭と半広の中間に位置する。これは、厦門語の[e]と日本語の工段音の[e]とは非常に似ていることから見てわかる。例えば、日本語の「例年[reinen]」、「提出[teiwutsu]」の[e]は厦門語の「例年[rei⁶⁸ ɲi³]」、「提出[t'e²⁸ ts'ut⁷]」の[e]とは聴覚印象では非常に似ている。ただし、日本語の工[e]よりは僅かながら口唇がやや両

口角にひかれている点では違う。北京語の単独に音節をなすeが舌位がさらに後寄りの[ɤ]であるが、「衛生[wei⁴ʂəŋ¹] (衛生)」,「恩情[en¹ ʈɛŋ²]」などのように、重母音や[en]の中の[e]は、厦門語の[e]に似ている音である。

厦門語の[e]の語例を下記に挙げる。

語例	我的	[ɣua ³ e]	(私の)	皮鞋	[p'e ² ue ²]	(革靴)
	会穿的	[e ⁶⁸ ʈɛŋ ⁶ e]	(着れる)	馬路	[ʂe ³⁸ lɔ ⁶]	(道路)
	無勢	[ʂo ²⁸ se ⁵]	(能無し)	行過	[kɪā ²⁸ ke ⁵]	(通りかかる)
	綠茶	[hik ³⁸ te ²]	(緑茶)	旅客	[ɾu ³⁸ k'e ² ʔ]	(旅客)

一方、広義の厦門語のeは[e]ではなく、北京語の[ɤ]である。下記に引用するように、厦門の郊外や同安地方のeは[ɤ]である⑬。

厦門方言内部の差異

	市街区	遠郊	同安
皮	p'e	p'ɤ	p'ɤ
飛	pe	pɤ	pɤ
糜	be	bɤ	bɤ
妹	be	bɤ	bɤ
郭	keʔ	kɤʔ	kɤʔ
月	geʔ	gɤʔ	gɤʔ
雪	seʔ	sɤʔ	sɤʔ

なお、厦門語の[e]の口語と文口語の対応を下記に示す。

語例	口語	文口語	北京語
把	[pe ³]	[pa ³]	[pa ³]
皮	[p'e ²]	[p'i ²]	[p'i ²]
貨	[he ⁵]	[ho ⁵]	[huo ⁴]
袋	[te ⁶]	[tai ⁶]	[tai ⁴]
飛	[pe ¹]	[ʔui ¹]	[fei ¹]
地	[te ⁶]	[ti ⁶]	[ti ⁴]

[a] [a]は非平唇の前舌広母音である。IPAの[a]よりやや後寄りである。

[a]について羅体系では次のように記されている。

[a]には3つの音値がある。単独の場合に或いは[ai], [uai], [au], [iau],

[ä], [äi], [uäi], [an], [ian]の中では舌位はNO.4の基本母音[a]よりやや

後寄りであり, [ia], [iã], [üã], [ãü], [iãü], [uan], [aŋ], [iaŋ], [at], [ak]

の中ではほぼ中性の[A]音に近い。[ua], [uaŋ], [uat], [am], [iam], [ap],

[iap]の中では, 中性の[A]とN0.5の基本母音[a]との中間になる⑭。

これに対して董体系や袁体系もほぼ同じ記述である。一方, 詹体系は下記のように記されている。

aの音値は一般は[A]に近いが, -n, -ŋ, -t, -kなどの末子音の影響で前後ずれることがある。若者の中では, ian, とiatの中のaは明らかに舌位が高くなり, eかeになり, ien(ien)かiet(iet)のように, 北京語に近づく傾向である⑮。

上記のように, 厦門語の[a]は基本母音第4番の[a]より舌の位置はやや後ろ寄りであるが, 日本語の「あ」の母音[a]よりやや舌位が前寄りであり, 基本母音第4番の[a]と日本語の[a]のほぼ中間に位置する母音である。口の開きが北京語の[a]ほど広くもなく, 舌の位置もやや前寄りである。[a]の前後に副音[i][u]が来るときに, 副音の舌位に影響されて[a]の舌位はやや前後にずれる。[a]の前に前舌の狭母音[i]が来ると, [a]はやや前舌寄りの半広母音に近い音になり, 奥舌の狭母音[u]が来ると, [a]はやや中舌寄りの半広母音に近い音になる。[a]の前後に[i]と[u]に挟まれるときには特に舌の位置はずれないが, [a]の後ろに鼻音の[n]と[ŋ]が来るときに舌の位置がやや大きくずれる。例えば, [ian]の場合は前舌の[n]の影響で[a]は口の開きがそれほど平唇にはならないが, 舌の位置がやや前にずれて, 基本母音第3番の[e]に近い音であり, [iaŋ]の場合は, 奥舌の[ŋ]の影響で[a]は舌の位置が後ろにずれて, 基本母音第5番の[ɑ]に近い音になる。[ian]は[ien], [iaŋ]は[iaŋ]のように記述できるが, このような環境における母音の変化はたいていの言語においても起こり得る現象である。本稿では, [ian], [iaŋ], [aŋ]のように表記する。

厦門語の[a]の語例を以下に示す。

例	亞軍	[a ⁵⁵ kun ¹]	(第2位)	柑仔	[kam ¹⁸ a ³]	(蜜柑)
	阿弟	[a ¹⁸ ti ⁶]	(弟)	暗頭仔	[am ¹⁸ t'au ²⁵ a ³]	(夕方)
	紅茶	[aŋ ²⁶ te ²]	(紅茶)	抑是	[aʔ ⁸ ɕi ⁶]	(それとも)
	国家	[kɔk ⁷⁸ ka ¹]	(国家)	安靜	[an ¹⁸ ɕeiŋ ⁶]	(静か)

一方, 日本語の「ア, カ, サ, タ, ナ, ハ, マ, ラ」の母音[a]は, 厦門語の[a]よりやや後ろ寄りであるが, この[a]は前後に狭い母音に挟まれると, 舌の位置が前後にずれる。例えば, 「ヤ」は一般に[ja]と表記するが, この[ja]の[a]は厦門語の[a]とはほぼ同じ音である。

なお, 厦門語の[a]の口語と文口語の対応を下記に示す。

語例	口語	文口語	北京語
飽	[pa ⁸]	[pau ⁸]	[pau ⁸]
田	[ts'an ²]	[t'ian ²]	[t'ian ²]
東	[tɔŋ ¹]	[tɔŋ ¹]	[tɔŋ ¹]
力	[ɬat ⁸]	[ɬik ⁸]	[li ⁴]
沙	[sua ¹]	[sa ¹]	[ʂa ¹]
破	[p'ua ⁵]	[p'o ⁵]	[p'o ⁴]

[ɔ] [ɔ]はやや円唇の奥舌半広母音である。IPAの[ɔ]とほぼ同じ音である。

[ɔ]について羅体系では次のように記述されている。

[ɔ]には2個の音値がある。単独の場合と[ɔ:ŋ]の中では、軟口蓋が咽頭(Pharynx)を圧迫するため、NO.6の基本母音[ɔ]よりも後寄りに聞こえるが、母音図ではその位置がない。[ɔ], [iɔŋ], [ɔ:ŋ], [iɔk]の中では、ほぼNO.6の基本母音と同じである⑩。

これに対して、董体系は「ɔは奥舌面の、半広、円唇の音であるが、後続するものがない場合とkが後続する場合は基本母音のɔにやや似ているが、ŋが後続する場合はやや狭くなる」⑪とし、詹体系では「ɔの発音はやや中央寄りであり、口はそれほどまるくない」⑫と指摘されているが、筆者の観察では、厦門語の[ɔ]は、日本語の[o]よりは開いているが、口唇の形は日本語の[o]よりもやはりまるい。[ɔ]のような母音は日本語には見られないが、北京語には、例えば、「工作[kɔŋ¹ tsuo⁴](仕事)」, 「天空[t'ian¹ k'ɔŋ¹](空)」, 「紅色[xɔŋ² sɿ⁴](赤色)」などに見られる[ɔ]は厦門語の[ɔ]に近い音である。

厦門語の[ɔ]の語例を下記に示す。

語例	白鷺	[pe ⁷⁸ lɔ ⁶]	(白鷺)	補物	[pɔ ¹⁸ mɪ ^{7?}]	(滋養品)
称呼		[ɬɪŋ ¹⁸ ho ¹]	(称呼)	塗粉	[t'ɔ ⁶⁸ ɸun ⁵]	(埃)
所在		[sɔ ¹⁸ tsai ⁶]	(所在)	故宮	[kɔ ⁵⁸ kiɔŋ ¹]	(故宮)
佛祖		[put ⁸⁸ tsɔ ⁸]	(仏祖)	護士	[hɔ ⁶⁸ su ⁶]	(看護婦, 士)

なお、厦門語の[ɔ]の口語と文口語の対応を下記に示す。

語例	口語	文口語	北京語
敷	[pɔ ¹]	[ɸu ¹]	[fu ¹]
刹	[pɔk ⁷]	[pak ⁷]	[po ¹]
雨	[hɔ ⁶]	[u ⁶]	[y ⁸]
芋	[ɔ ⁶]	[u ⁶]	[y ⁴]

[o] [o]は円唇の奥舌半狭母音である。IPAの[o]よりはやや前寄りである。

[o]については羅体系では下記のように記述している。

[o]はNO.7の基本母音[o]よりはやや前であり、円唇の程度もやや減る。

単独の場合は[io]の場合よりはさらに前である⑩。

これに対して、董体系や袁体系もほぼ同じ記述であるが、詹体系は下記のように記されている。

oの発音は北京語のoよりやや円唇であり、舌位も高い。年配の方の発音はわりとまるいが、若者と子供はすでに次第に[y]へと変化しつつある。厦門のyは発音する際、口唇の形が変わらず、元のままを保つが、北京語のyの発音のように両唇が明らかに口角に開かれない。oがyへと変化するため、io, oʔ, ioʔもiy, yʔ, iyʔへと変化する傾向がある⑪。

筆者の観察では、確かに厦門語の「可能[k' o³⁸ tɕiŋ²]」を北京語の「可能[k' y³⁸ nən²]」のように発音する若者はいるが、しかし、極僅かであり、まだ詹体系の言うほどの傾向が見られない⑫。

厦門語の[o]は日本語のオ段の母音[o]よりはやや舌位が高く、口唇の形もやや丸い。[o]は平唇の狭母音[i]に先行される場合、舌位が前にずれて、口唇の形状も円唇からやや緩やかになるが、基本的には円唇であり、非円唇の半狭奥舌母音の[y]にはならない。これは日本語のオ段の発音を学習するときにもわかるが、北京語話者が日本語のオ段の母音[o]を常に[ou]か[y]のように発音されるが、厦門語話者には日本語の[o]を[o]のように発音することは観察されることがあるが、[y]のように発音する間違いはほとんど見られないのも証拠の一つである⑬。

厦門語の[o]の語例を下記に示す。

語例	破費	[p' o ⁵⁵ ɕui ⁵]	(散財する)	電影票	[tɕian ⁶⁵ iã ³⁸ p' io ⁵]	(映画的チケット)
	多謝	[to ¹⁸ ɕia ⁶]	(感謝する)	草稿	[ts' o ³⁸ ko ³]	(草稿)
	好勢	[ho ³⁸ se ⁵]	(似合う)	倒去	[to ⁵⁵ k' i ⁵]	(戻る)

なお、厦門語の[o]の口語と文口語の対応を以下に示す。

語例	口語	文口語	北京語
無	[ʃo ²]	[ʃu ²]	[u ²]
学	[oʔ ⁸]	[hak ⁸]	[ɕye ²]
表	[pio ⁸]	[piaɯ ⁸]	[piaɯ ⁸]
略	[tʰioʔ ⁸]	[tʰioɕ ⁸]	[lye ⁴]

[u] [u]は円唇の奥舌狭母音である。IPAの[u]よりはやや前寄りである。

[u]について羅体系は下記のように記述されている。

[u]には4個の音値がある。単独の場合と[iu],[iũ],[ãũ],[ĩãũ]の中にある場合はNO.8の基本母音[u]と似ているが、口唇がやや開いている。その他のu-類或いは—u-類の韻母の中では緩い[ũ]であり,[ue][uai]の中ではNO.7の基本母音[o]に近づく傾向がある。[un][ut]の中では普通の[ũ]よりはやや前であるが、奥舌母音[ũ]から舌先音[n]か[t]へわたる際に、中間に[ə]のようななわたり音(glide)が存在するようである。この4種類の音値とも英語の平唇のような口唇の形に似ており、完全な円唇ではない㉓。

しかし、厦門語の[u]の口唇の形については、筆者の観察ではやはり円唇の[u]である。これは、厦門語話者が日本語のウ段音を習得する際に、[w]の発音ができず、北京語話者と同じように、円唇の[u]で代用する間違いが観察されることから見てわかる。例えば、日本語の「すぐ[sɯgɯ]」を[sugu]、「読者[dokɯɕa]」を[dokuɕa]のように発音したりする。そして、[u]は厦門方言の内部でも差異の大きい音であり、広義の厦門語の中には、厦門近郊で[u]と発音するのを同安県の場合には、[w]と発音する。例えば、「猪[tu]」を[tw]、「去[k'u]」を[k'w]のように発音する㉔。

従って、厦門語の[u]は基本母音の[u]ほどの円唇ではないが、北京語の[u]には似ており、そして日本語のウ段音のような平唇の[w]になる傾向は見られない。

厦門語の[u]の語例を以下に示す。

語例	護士	[hɔ ^{6s} su ⁶]	(看護婦, 士)	滾水	[kun ^{3s} tsui ³]	(お湯)
	開車	[k'ui ^{1s} ɕia ¹]	(車を運転する)	看煞着	[k'ũã ^{5s} ɕue ^{6s} tio ^{7s}]	(見えない)
無半句話	[ɕo ^{2s} pũã ^{5s} ku ^{5s} ue ⁶]	(一言もなく)	水	[sui ³]	(きれい)	
	牛奶粉	[ŋu ^{2s} nɿ ^{1s} ɕun ³]	(粉ミルク)	俗語	[ɕiok ^{8s} ŋu ³]	(俗語)
	大学	[tua ^{6s} o ^{7s}]	(大学)	落船	[ro ^{7s} tsun ²]	(下船)
	有身	[u ^{6s} ɕin ¹]	(妊娠)	做人	[tsue ⁵ laŋ]	(嫁ぐ)

なお、厦門語の[u]の口語と文口語の対応を下記に示す。

語例	口語	文口語	北京語
旧	[ku ⁶]	[kiu ⁶]	[ɕiu ⁴]
樹	[ɕiu ⁶]	[su ⁶]	[ɕu ⁴]
久	[ku ⁸]	[kiu ⁸]	[ɕiu ⁸]
有	[u ⁶]	[iu ⁸]	[iu ⁸]

2. 重母音 [ai],[au],[ia],[ua],[iu],[ui],[io],[ue],[iau],[uai]

厦門語の口母音の体系には、重母音が10個観察される。この10個の重母音の組み合わせを見る

と、まず、音節副音として[i]と[u]があり、音節主音としては[i][e][a][o][u]の5個である。すなわち、単母音の[o]が重母音には現れないのである。そして、頭子音との組み合わせを見ると、まず、鼻子音の[m][n][ŋ]との組み合わせがないのは重母音の共通点である。そして、[ia], [iu], [io], [iau]は副音[i]によって頭子音が口蓋化するため、口蓋化子音との組み合わせが特徴である。一方、[ua], [ui], [ue], [uai]は副音[u]によって頭子音[h]が唇音化するため、両唇摩擦音の[ɸ]との組み合わせが特徴である。

副音[i]と[u]の音声については先行研究では次のような記述が見られる。

まず、羅体系では次のように記されている。

厦門語の韻頭は平唇のi-類と円唇のu-類しかない。そして「音長」も北京語のように短くなく、子音の[j], [w]に変化する傾向が見られない。したがって、[ia], [io], [iu], [ua], [ue], [ui]は前部が短く、後部が長い重母音でもなければ、前部が長く、後部が短い[ai][au]とも異なり、前後の母音が同じ長さなのである②。

したがって、二重母音が同じ長さで発音される点では、厦門語の二重母音は北京語のとは違い、むしろ日本語の二重母音に似ている。例えば、北京語話者のように、日本語の「上[ue]」を[we]のように発音することは厦門語話者には観察されない。ただし、副音[i][u]が後部にあるときは厦門語も北京語も短いので、日本語の「はい[hai]」を、北京語話者も厦門語話者も[hai]のように発音され、二音節の「はい」を一音節のように発音されてしまうことなどが観察される。董体系では次のように記述されている。

(前部副音の)iは大体主母音のiと同じが、主母音oが後続すると口唇の形はややまるくなる。

(前部副音の)uは大体主母音のuと同じが、どんな頭子音に先行されても舌位が中央よりにならない。

(後部副音の)iは主母音iと副音iよりもやや広い。

(後部副音の)uは主母音uと副音uよりもやや広いが、au, iauの中では、さらに低い声調がかかると一層短く、弱くなる②。

すなわち、厦門語の副音[i][u]の一番大きな特徴は、わたり音でありながら、発音時間が主母音とほぼ同じ長さであり、いわゆる半母音[j][w]のように子音的な要素は見られないところである。厦門語の口母音体系の重母音の語例を下記に示す。

[ai]	愛	目眉	[ʃak ⁸⁸ ʃai ²]	(眉)
[au]	後	戸頭	[hɔ ⁶⁸ t'au ²]	(口座)
[ia]	野	上車	[ɲɪu ⁶⁸ ɲia ¹]	(乗車)
[ua]	画	大学	[tua ⁶⁸ oʔ ⁸]	(大学)

[iu]	油	牽手	[k'an ¹⁶ ɲiu ⁸]	(婁)
[ui]	位	排隊	[pai ²⁸ tui ⁶]	(列を並ぶ)
[io]	腰	尿布	[tʰio ⁶⁸ so ⁵]	(おむつ)
[ue]	話	做𦵇了	[tsue ⁵⁸ ɬue ⁶⁸ tʰiau ⁸]	(完成できない)
[iau]	要	跳高	[t'iau ⁵⁸ ko ¹]	(走り高跳び)
[uai]	歪	快件	[k'uai ⁵⁸ kʰa ⁶]	(速達)

なお、厦門語の重母音に見られる口語と文口語の対応を下記のように示す。

重母音	語例	口語	文語	北京語
[ai]	師	[sai ¹]	[su ¹]	[ʃɿ ¹]
[au]	到	[kau ⁵]	[to ⁵]	[tau ⁴]
[ia]	騎	[k'ia ²]	[k'i ²]	[ɲi ²]
[ua]	徙	[sua ³]	[ɕi ³]	[ɕi ³]
[iu]	樹	[ɲiu ⁶]	[su ⁶]	[ʃu ⁴]
[ui]	氣	[k'ui ¹]	[k'i ⁵]	[ɲi ⁴]
[io]	表	[pio ⁸]	[piau ⁸]	[piau ⁸]
[ue]	買	[ɬue ⁸]	[māi ³]	[mai ³]
[iau]	釣	[tio ⁵]	← [tiau ⁵]	[tiau ⁴]
[uai]	怪	[kue ⁸]	← [kuai ⁵]	[kuai ⁴]

ただし、上記「←」の場合のように、[iau]と[uai]は口語には見られず、対応する口語はそれぞれ[io], [ue]である。

3. 鼻母音 [ä], [ɿ], [ɛ], [ɤ], [äɿ], [äʊ], [ɿä], [ɿʊ], [ʊä], [ʊɿ], [ɿəʊ], [ʊäɿ]

厦門語の鼻母音は口母音と比べて数のうえでは、単母音が2個少なく、重母音も2個少なく、合計12個で、口母音の16個より4個少ない。

厦門語の鼻母音の形成は、母音が音節末鼻音に同化されて鼻音化し、さらに末鼻音が脱落することによって形成される。そして、鼻母音のほとんどは口語の体系にしか現れない。したがって、鼻母音は厦門語の口語体系の最も大きな特徴である。

厦門語の鼻母音については羅体系は下記のように記述されている。

厦門語の半鼻音は母音と同時に発音するため、フランス語の[~]式と同じであるが、南京の[口~]式とは違い、後続する語の同化を受けにくい。これはほとんど-m, -n, -ŋなどの末子音の脱落に由来する。厦門語の口語のなかでは、-m, -n, -ŋが脱落することにより、母音が完全に半鼻音になるだけではない。

く、音節初頭の子音も同様な影響を受ける。したがって、口語の「敢」[kǎ]の

k,「餅」[pĩǎ]のp,「山」[sũǎ]のsも、半鼻化の傾向がある⑦。

羅体系の言う半鼻音とはすなわち鼻音化母音のことである。

このように、厦門語の鼻母音は末鼻音の脱落によって定着されているため、北京語や日本語などに見られる母音の鼻音化とは違うことがわかる。例えば、日本語の「100万円」は[çjakumānēn]のように、母音のア[a],エ[e]は前後の鼻音に挟まれて鼻音化して発音したりすることもある。しかし、厦門語ではこのような鼻母音は口語の中ではおおく見られるが、文口語の場合は、鼻音の末子音が脱落せずに発音され、そして口語の鼻母音と対応させて、使い分けをしていることがわかる。

厦門語の口語と文口語に見られる口母音と鼻母音の対応を以下に示しておく。

口語	文口語	語例	口語	文語	北京語
[ĩ]	[iam]	添	[t'ĩ¹]	[t'iam¹]	[t'ian¹] (増加)
	[ian]	天	[t'ĩ¹]	[t'ian¹]	[t'ian¹] (空)
	[iŋ]	青	[tʰĩ¹]	[tʰiŋ¹]	[tʰiŋ¹] (青)
[ǎ]	[am]	担	[tǎ¹]	[tam¹]	[tan¹] (担う)
[ũǎ]	[an]	單	[tũǎ¹]	[tan¹]	[tan¹] (単なる)
	[uan]	官	[kũǎ¹]	[kuan¹]	[kuan¹] (官)
[ĩǎ]	[ian]	健	[kĩǎ⁶]	[kian⁶]	[tʰian⁴] (健やか)
	[iŋ]	定	[tĩǎ⁶]	[tiŋ⁶]	[tiŋ⁴] (決める)
[ĩũ]	[iŋ]	姜	[kĩũ¹]	[kiŋ¹]	[tʰiaŋ¹] (生姜)

なお、厦門語の鼻母音の語例を下記に示す。

語例	[ĩ]	天氣	[t'ĩ¹⁵ k' i ⁵]	(天氣)
	[ē]	嬰仔	[ē¹⁵ a ⁸]	(赤ん坊)
	[ǎ]	三弦	[sam¹⁵ çian²]	(三味線)
	[ũ]	魔神	[mũ²⁵ çin²]	(気が狂っている)
	[ũĩ]	慣習	[kũĩ⁵⁵ ç i ⁵]	(慣習)
	[ĩǎ]	月餅	[çeŋ⁵⁵ pĩǎ³]	(月餅)
	[ũǎ]	觀看	[kuan¹⁵ kũǎ⁵]	(觀察)
	[ǎĩ]	貴好	[mǎĩ ⁶⁵ ho ⁸]	(機嫌をとる)
	[ǎũ]	電腦	[tian⁶⁵ nǎũ³]	(コンピュータ)
	[ĩũ]	姑娘	[ko¹⁵ nĩũ²]	(修道女)
	[ĩǎũ]	鳥瞰	[pĩǎũ⁵⁵ kam⁵]	(鳥瞰)

[ɔ̃ɪ] 横行 [ɸɔ̃ɪ²⁵ ɕiŋ³] (横行する)

4. 母音と末子音 ([i], [u]) ([e], [a], [ɔ], [o]) ([m], [n], [ŋ], [p], [t], [k], [ʔ])

厦門語の母音と末子音との関係は、主に末鼻音の脱落による母音の鼻音化と末子音の声門化にその特徴が現れている。そして、口語では鼻音化母音と声門化音が多く観察され、文口語では鼻音の末子音と閉鎖音の末子音が多く観察される。しかし、羅体系に指摘されているように、「もし我々はその一端で以て字音(文口語)が話音(口語)より古く、或いは話音が字音より古いと断定してしまうと、一方性の間違いを免れない」^⑧。文口語の体系は常に官話に左右されるが、口語は日常生活と密接な関係にある。語彙としては文口語の体系は発達しているが、音声としては口語はその方言のらしさを保っている。勿論、現代厦門語の口語と文口語音声体系も互いに影響しあったり、方言のらしさを保ちながら、北京語の音声体系に次第に近付いていくであろう。

次に、厦門語の鼻母音が末鼻音[m][n][ŋ]の脱落との関連や末閉鎖音の逆行同化を見ていくことにする。

まず、末子音[m], [n], [ŋ]の脱落とそれによって先行する母音が鼻音化する問題であるが、これもやはり一種の末子音の逆行同化現象である。普通、母音と子音との同化は、Schachter 1969によると、「非母音の素性値は、隣接する母音の素性値に同化するのであって、その逆ではない」と主張している。しかし、「隣接する鼻音の影響によって母音が鼻音化とするのは非常に自然であるが、その逆は非常に不自然である」^⑨と一見矛盾した説のようにとられるが、しかし、厦門語の場合は、「媒人[hɪ²⁵ lɛŋ³] (媒酌人)」、「戲院[ɕi⁵⁵ hɪ⁶] (劇場)」のように鼻音が音節主音になることもあるように、鼻音は母音の素性値の強い子音である。したがって、末鼻音は隣接する母音との同化は非常におきやすいのである。

厦門語の鼻母音の生成過程はまず、先行する母音が末鼻音の[m], [n], [ŋ]の逆行同化により鼻音化し、それから末鼻音[m], [n], [ŋ]はさらに鼻音化した母音との完全同化によって脱落する。末鼻音の脱落によって、鼻母音が定着するわけである。ただ、部分同化の場合は、鼻母音が定着しないのである。北京語の鼻音化母音や日本語の鼻音化母音も部分同化であるため、末鼻音の脱落はないわけである。

次は、閉鎖音の末子音の逆行同化については先行研究には次のような記述が示されている。

羅説では下記のように記述されている^⑩。

普通、会話の際、[-m], [-p]と[-ŋ], [k]は比較的に安定しており、次の言葉に同化されないが、[-n], [-t]の場合は違う。例えば、

新 婦	[sin ̣pu]	→	[sim pu]	(新婦)
身 命	[sin bi ̣ŋ]	→	[sim bi ̣ŋ]	(命)

牽亡	[k'an _u baŋ]	→	[k'am baŋ]	(亡霊を導く)
牽馬	[k'an _u be]	→	[k'am be]	(馬をひっぱる)
身軀	[sin _u k'u]	→	[sin k'u]	(体のサイズ)
失味	[sit _u bi]	→	[sip bi]	(味がなくなる)
發汗	[huet _u kūā]	→	[huak kūā]	(発汗)

このような現象は厦門語の中ではよく見られる。そしてさらに、頭子音の同化から頭子音の脱落が観察される。例えば、

中国	[tɕiŋ kɔ:]	→	[tɕiŋ ɔ:]	(中国)
給我	[ka guā]	→	[ka uā]	(私にくれる)
三十四	[sā tsap si]	→	[sā ap si]	(34)
我要出去	[gua be? ts'ut k'i]	→	[gua e ts'ut i]	(私は外へ出たい)

(注:原文の語例を一部省略した)

これに対して、董説はさらに次のように有声の同化を指摘した④。

末子音のp, t, kは複合語の中で後続する母音の影響で有声化する。

a) p→b(或いはβ):	下細雨	ho ⁶ sap ¹ a ³	→	ho ⁶ sab(β) ¹ a ³	(小雨が降る)
b) t→l:	一個	tsit ⁷ e ²	→	tsil ⁷ e ²	(一個)
c) k→g(或いはγ):	竹子	tik ⁸ a ³	→	tig ⁸ (γ)a ³	(竹)

羅説や董説が指摘された厦門語のこのような同化現象は北京語にも観察される⑤。例えば、

很好	[xən ³ xau ³]	→	[xən ² xau ³]	(非常に良い)
面包	[mian ⁴ pau ¹]	→	[miam ⁴ bau ¹]	(パン)
扁豆	[pian ³ tou ⁴]	→	[pian ³ dou ⁴]	(鷹元豆)
平安	[p' iŋ ² an ¹]	→	[p' iŋ ² ŋan ¹]	(無事)

そして、同化した後は厦門語のように鼻音が音節主音になる現象も見られる。例えば、

他們	[t'a ¹ men]	→	[t'a ¹ ŋ]	(彼ら)
我們	[uo ³ men]	→	[uo ³ ŋ]	(私たち)
多么	[tuo ¹ mē]	→	[tuo ¹ ŋ]	(なんと)
公母倆	[koŋ ¹ mu ³ lia ³]	→	[koŋ ¹ ŋlia ³]	(両親)

このような同化現象はもちろん日本語にも観察される。日本語のいわゆる「音便」、「連濁」、「約音」などがそうである。

以下は北京語の発音を対照させ、厦門語の母音+末子音の口語と文口語の対応を示しておく。

1) 母音+m 先行研究では各体系とも[im], [am], [iam]の3個である。[im], [am], [iam]とも文口語であり、口語には観察されず、対応する音声はそれぞれ次のようである。

語例	口語	文口語	北京語
[im] 林	[nã ²] ←	[him ²]	[lin ²]
[am] 胆	[tã ³] ←	[tam ³]	[tan ³]
[iam] 鹹	[kĩ ¹] ←	[kiam ³]	[ɕian ³]

2) 母音+n 先行研究では各体系とも[in], [an], [un], [ian], [uan]の5個である。

語例	口語	文口語	北京語
[in] 面	[ɕin ⁶]	[ɕian ⁶]	[mian ⁴]
[an] 田	[ts'an ²]	[t'ian ²]	[t'ian ²]
[un] 船	[tsun ²]	[suan ²]	[tɕuan ²]
[ian] 研	[ɣian ³]	[ɣian ²]	[ian ²]
[uan] 川	[ts'ŋ ¹] ←	[ts'uan ¹]	[tɕuan ¹]

3) 母音+ŋ 先行研究では、羅体系、袁体系は[iəŋ], [aŋ], [oŋ], [iaŋ], [ioŋ], [uaŋ]の6個であるが、ただし、現代厦門語では[uaŋ]と[uan]は区別しないので、[uaŋ]は[uan]と記述するのは一般的である。例えば、羅体系で挙げる語例「權[kuaŋ]」は現在では[kuan]と読む。したがって、董体系、詹体系、周体系の[iŋ], [aŋ], [oŋ], [iaŋ], [ioŋ]の5個が一般的である。ただ、[iaŋ]と[ioŋ]は口語には観察されず、文口語の体系に観察されるのみである。

語例	口語	文口語	北京語
[iŋ] 眼	[ɣiŋ ³]	[ɣan ³]	[ian ³]
[aŋ] 東	[taŋ ¹]	[toŋ ¹]	[toŋ ¹]
[oŋ] 胖	[p'oŋ ⁵]	[p'oŋ ⁵]	[p'oŋ ⁴]
[iaŋ] 響	[ɕiŋ ³] ←	[ɕian ³]	[ɕian ³]
[ioŋ] 龍	[hiŋ ²] ←	[hioŋ ²]	[loŋ ²]

4) 母音+p 先行研究では各体系とも[ip], [ap], [iap]の3個である。[ip]の場合は「埤」は口語では[sap⁷]と言い、文口語では[ɣip⁸]と言う以外に口語、文口語とも、同じ[ip]である。しかし、文口語にしか観察されない[ap], [iap]に対応するのは、声門化が特徴の[aʔ]と[iaʔ]である。

語例	口語	文口語	北京語
[ip] 及	[kip ⁸]	[kip ⁸]	[ɕi ²]
[ap] 壓	[aʔ ⁷]	[ap ⁷]	[ia ¹]
[iap] 蝶	[iaʔ ⁸]	[tiap ⁸]	[tie ²]

5) 母音+t 先行研究では各体系とも[it], [at], [ut], [iat], [uat]の5個である。ただし、羅体系では[iet], 董体系では[iet]と表記しているのを現在の[iat]とする。

	語例	口語	文口語	北京語
[it]	蜜	[6it ⁸]	[6it ⁸]	[mi ⁴]
[at]	密	[6at ⁸]	[6it ⁸]	[mi ⁴]
[ut]	佛	[put ⁸]	[ɸut ⁸]	[fo ²]
[iat]	別	[pat ⁸]	[piat ⁸]	[pie ²]
[uat]	抹	[6ua ⁷]	[6uat ⁸]	[ma ¹]

6) 母音+k 先行研究では各体系とも[ik], [ak], [ɔk], [iak], [iok]の五個である。ただし, [iok]を羅体系では[iǝk]と表記しているが, 現在では[iok]とするのが一般的である。

	語例	口語	文口語	北京語
[ik]	竹	[tik ⁷]	[tiok ⁷]	[tʂu ²]
[ak]	木	[6ak ⁸]	[6ɔk ⁸]	[mu ⁴]
[ɔk]	駁	[pɔk ⁷]	[pak ⁷]	[po ²]
[iak]	逼	[piak ⁷]	[pik ⁷]	[pi ¹]
[iok]	玉	[ɣik ⁸]	[ɣiok ⁸]	[y ⁴]

7) 母音+ʔ 先行研究では羅体系, 袁体系とも記述なしであるが, 董体系は次の10個である。

[iʔ] [eʔ] [aʔ] [oʔ] [uʔ] [uiʔ] [ueʔ] [iaʔ] [uaʔ] [ioʔ]

詹体系はそのうえに3個追加して13個である。

[iʔ] [eʔ] [aʔ] [oʔ] [uʔ] [uiʔ] [ueʔ] [iaʔ] [uaʔ] [ioʔ]

[auʔ] [iuʔ] [iauʔ]

周体系はさらに2個追加して15個である。

[iʔ] [eʔ] [aʔ] [oʔ] [uʔ] [uiʔ] [ueʔ] [iaʔ] [uaʔ] [ioʔ]

[auʔ] [iuʔ] [iauʔ]

[ɔʔ] [uaiʔ]

ただし, 詹体系と周体系に追加の[iuʔ], [iauʔ], [ɔʔ], [uaiʔ]の4個は対応する文口語がなく, あてる漢字もない純口語である。本稿では, 便宜のため, それぞれの意味をとって, [iuʔ]は「瘰癧」の「瘰」, [iauʔ]は「挾(こ)じ開ける」の「挾」, [ɔʔ]は「嘔吐」の「嘔」, [uaiʔ]は「擒挫」の「挫」であてることとする。周体系の15個の口語と文口語の対応を下記に示す。

	語例	口語	文口語	北京語
[iʔ]	鉄	[t'iʔ ⁷]	[t'iat ⁷]	[t'ie ³]
[eʔ]	月	[ɣeʔ ⁸]	[ɣuat ⁸]	[ye ⁴]
[aʔ]	搭	[taʔ ⁷]	[tap ⁷]	[ta ²]
[oʔ]	学	[oʔ ⁸]	[hak ⁸]	[ɕye ²]

[uʔ]	托	[t'uʔʔ]	[t'okʔ]	[t'uo¹]
[uiʔ]	血	[ɸuiʔʔ]	[ɕiatʔ]	[ɕye³]
[ueʔ]	笠	[d̥ueʔʔ]	[ɸipʔ]	[li⁴]
[iaʔ]	壁	[piaʔʔ]	[pikʔ]	[pi⁴]
[uaʔ]	熱	[duaʔʔ]	[ɸiatʔ]	[ʒɣ⁴]
[ioʔ]	略	[ɸioʔʔ]	[ɸiokʔ]	[lye⁴]
[auʔ]	暴	[pauʔʔ]	[pɔkʔ]	[pau⁴]
[iuʔ]	痠(筋肉が攣る)	[kiuʔʔ]		[ɸɛiŋ⁴]
[iauʔ]	挟(こじ開ける)	[kiaʔʔ]		[ɸɛye²]
[ɔʔ]	嘔(嘔吐)	[ɔʔʔ]		[ou³]
[uaiʔ]	挫(捻挫する)	[tsuaiʔʔ]		[ts'uo⁴]

8) 鼻母音+? 先行研究では羅体系,董体系,袁体系とも記述なしであるが,詹体系は下記の8個である。

[ɪʔ] [ɛʔ] [ǣʔ] [ɔʔ] [ɪǣʔ] [ǣuʔ] [uǣʔ] [ɪǣuʔ]

周体系はそのうえさらに3個追加して11個である。

[ɪʔ] [ɛʔ] [ǣʔ] [ɔʔ] [ɪǣʔ] [ǣuʔ] [ɪǣuʔ]

[uǣʔ] [uǣɪʔ] [ɸʔ] [ɰʔ]

ただし,周体系では,詹体系の[uǣʔ]がなく,かわりに[uǣʔ]があるが,音声的に見れば両者は非常に近い音であることがわかる。本稿では周体系の[uǣʔ]の記述に従う。

語例	口語	文口語	北京語
[ɪʔ] 物	[mɪʔʔ]	[ɸutʔ]	[u⁴]
[ɛʔ] 脈	[mɛʔʔ]	[ɸikʔ]	[mai⁴]
[ǣʔ] 凹	[ǣʔʔ]	[au¹]	[au¹]
[ɔʔ] 膜	[mɔʔʔ]	[ɸokʔ]	[mo²]
[uǣʔ] 莢	[ŋuǣʔʔ]	[kiapʔ]	[ɸɛia²]
[ɪǣʔ] 赫	[ɕɪǣʔʔ]	[hikʔ]	[ɕia⁴]
[ǣuʔ] □(ロケッが爆むこと)	[mǣuʔʔ]		
[ɪǣuʔ] □(ピクリと動くこと)	[ŋɪǣuʔʔ]		
[uǣɪʔ] □(門が開く音)	[uǣɪʔʔ]		
[ɸʔ] 噁(感動詞)	[hɸʔʔ]		[en]
[ɰʔ] 呬(感動詞)	[hɰʔʔ]		[xen]

上記のように,[ǣuʔ],[ɪǣuʔ],[uǣɪʔ]には該当の漢字がないため,記号の「□」で代用する。

厦門語の母音の体系を付表Ⅰの「厦門語母音分布表」にまとめることができる。そして、厦門語の口語と文口語の対応を付表Ⅱの「厦門語口語・文口語体系表」にまとめることができる。そして参考までに厦門語の声調を付表Ⅲの「厦門語声調表」にまとめた。

5. おわりに

以上のように、現代厦門語の母音体系を見てきた。中国語の他の方言と比較してみると、厦門語の母音体系は口母音の体系と鼻母音の体系が対応し、そして口語の体系と文口語の体系が対応しているところは特徴である。しかしこれはあくまでも音声学的に厦門語の母音体系を分析したのにすぎず、これからの課題は音韻論的に厦門語の母音体系を記述し、分析しなければならないが、他の機会で論を進めたいつもりである。

・注・

- ① 羅常培1956、『厦門音系』,p10-14をご参照ください。なお、中国語の述語では、声母、韻母、声調などがあるが、それぞれ声母は音節の初頭子音で、一般に頭子音と言うが、韻母は音節主音をはじめ、介音(わたり音)と韻尾(音節末子音)を含む。声母がなくても、韻母はなければならない。声調はアクセントのことであるが、厦門語の声調は付表Ⅲをご参照ください。
- ② それぞれ羅常培1956、『厦門音系』p41,袁家驊1960、『漢語方言概要』p254,詹伯慧1981、『現代漢語方言』p194,周長樺1995、『厦門方言詞典』p19の關係項目をご参照ください。
- ③ 口語と文口語の使い分けは吳方言にも見られるが、厦門語ほど口語と文口語は体系をなして使い分けしていない。詹伯慧1981,p115をご参照ください。
- ④ 羅常培1956,p11。
- ⑤ 羅常培1956,p12。
- ⑥ 音声文字の右肩にある[¹~⁸]の数字は厦門語の声調を表している。[²⁵]の場合は声調は第2声の変調(sはsandhiの略)を示す。なお、厦門語の声調は付表Ⅲをご参照ください。
- ⑦ 董同和1957,p237をご参照ください。
- ⑧ 袁家驊1960,p246をご参照ください。
- ⑨ 詹伯慧1981,p191をご参照ください。
- ⑩ 服部四郎1984、『音声学』p58をご参照ください。
- ⑪ 羅常培1956,p11をご参照ください。
- ⑫ 董同和1957,p238をご参照ください。
- ⑬ 周長樺1995,p5をご参照ください。
- ⑭ 羅常培1956,p11をご参照ください。

- ⑮ 詹伯慧1981,p192をご参照ください。
- ⑯ 羅常培1956,p11をご参照ください。
- ⑰ 董同和1957,p238をご参照ください。
- ⑱ 詹伯慧1981,p192をご参照ください。
- ⑲ 羅常培1956,p11をご参照ください。
- ⑳ 詹伯慧1981,p191をご参照ください。
- ㉑ 朱新建1995,『中国語海口・文昌方言に見られる入破音について』p87の語例をご参照ください。
- ㉒ 朱新建1991,『厦門語と日本語の音声の比較』p147をご参照ください。
- ㉓ 羅常培1956,p12をご参照ください。
- ㉔ 周長楫1995,『厦門方言詞典』p5をご参照ください。
- ㉕ 羅常培1956,p16をご参照ください。
- ㉖ 董同和1957,p238をご参照ください。
- ㉗ 羅常培1956,p17をご参照ください。
- ㉘ 羅常培1956,p48をご参照ください。
- ㉙ 安井稔編,1971,『新言語学辞典』p34,assimilationの項目をご参照ください。
- ㉚ 羅常培1956,p16をご参照ください。
- ㉛ 董同和1957,p239をご参照ください。
- ㉜ 林焯著,1990,『語音探索集稿』p45「北京話的連讀音変」をご参照ください。

[付表I]

厦門語母音分布表

後続部 口母音		単独でも音節がなせるもの												後続部 鼻母音	
		ゼ ロ	-i	-u	-m	-n	-ŋ	-p	-t	-k	-ʔ	-ɿ	-ʊ		
i	移		(油)	音	因	英	邑	逸	億	呪鴨嘔学 ①劃狹役活 藥		羊		引嬰銘惡	ɿ
e	的	愛	後	暗	安	紅	壓	遇	沃						
a	亞					王			惡						ä
ɔ	烏														ɔ
o	奧														
u	宇	(位)			雲			鬱						橫	ui
ui	位														
ue	話														
ia	野		要	炎	烟	央	葉	閱			弯			營	ia
ua	画	歪			遠			越						碗	ua
io						勇			約				②		uai
io	腰														
iu	油														

頭子音 口母音		単独で音節がなせず、頭子音の後にしか現れないもの										頭子音 鼻母音			
			ɸ-	ts-	tɕ-	ɕ-	ʃ-	ʃ-	m-	n-	ŋ-				
iʔ			覘					物脈					挾		iʔ
															ɛʔ
															uɛʔ
															äʔ
															ai
															au
auʔ		③						賣毛	④						auʔ
iaʔ						⑤	⑥								iaʔ
															iaʊ
iauʔ							⑦					⑧			iaʊʔ
uaiʔ			⑨												
iuʔ						⑩				膜					ɔʔ

注I: 記号①～⑩は該当する漢字がないことを示す。

注II: 表の上段は単独でも音節がなせるもののみ挙げ、下段は頭子音の後にしか現れないものだけ、且つ口母音と鼻母音が対応する頭子音のみを挙げた。

[付表Ⅱ]

厦門語口語・文口語対応表

語例			単母音			単母音			重母音		
單	單	重	口語	文口語	北京語	口語	文口語	北京語	口語	文口語	北京語
面田頁			ɕin ⁶	ɕian ⁶	mian ⁴	ts'an ²	t'ian ²	t'ian ²	iaŋ ⁸	ɕiat ⁸	ie ⁴
輕等壁			k'in ¹	k'ing ¹	ɕin ¹	tan ³	tiŋ ³	təŋ ³	piaŋ ⁷	pik ⁷	pi ⁴
眼東師			ɕiŋ ³	ɕan ³	ian ³	taŋ ¹	təŋ ¹	təŋ ¹	sai ¹	su ¹	ɕi ¹
肩虫利			kiŋ ¹	kian ¹	ɕian ¹	ts'ing ²	t'ioŋ ²	ts'əŋ ²	ɕai ⁶	ɕi ⁶	li ⁴
種節我			ɕiŋ ³	ɕioŋ ³	tsəŋ ³	tsueŋ ⁷	ɕiat ⁷	ɕie ²	ɕua ⁸	ŋɕ ³	uo ³
竹力徒			tik ⁷	tiok ⁷	tsu ²	ɕat ⁸	ɕik ⁸	li ⁴	sua ⁸	ɕi ³	ɕi ³
接刺帶			ɕei ⁷	ɕiap ⁷	ɕie ¹	pok ⁷	pak ⁷	po ¹	tua ⁵	tai ⁵	tai ⁴
鉄搭熱			t'io ⁷	t'iat ⁷	t'ie ³	ta ⁷	tap ⁷	ta ¹	ɕua ⁷	ɕiat ⁸	ɕy ⁴
貨貼刺			he ⁵	ho ⁵	xuo ⁴	ta ⁷	t'iap ⁷	t'ie ¹	kua ⁷	kat ⁷	ky ¹
袋教撥			te ⁶	tai ⁶	tai ⁴	po ¹	ɕu ¹	fu ¹	pua ⁷	puat ⁷	po ¹
飛無到			pe ¹	ɕui ¹	fei ¹	ɕo ²	ɕu ²	u ²	kau ⁵	to ⁵	tau ⁴
倍學走			pe ⁶	pue ⁶	pei ⁴	o ⁷	hak ⁸	ɕye ²	tsau ⁶	tsə ⁶	tsou ³
地月流			te ⁶	ti ⁶	ti ⁴	ɕe ⁷	ɕuat ⁸	ye ⁴	ɕau ²	ɕiu ²	liu ²
初胖表			ts'ue ¹	ts'ə ¹	ts'u ¹	p'əŋ ⁵	p'əŋ ⁵	p'əŋ ⁵	pio ³	piu ³	piu ³
買坂略			ɕue ³	māi ³	mai ³	sap ⁷	ɕip ⁸	ɕei ¹	ɕio ⁷	ɕio ⁸	lye ⁴
語例			單母音			鼻母音			重母音		
單	鼻	重主	口語	文口語	北京語	口語	文口語	北京語	口語	文口語	北京語
弟添梯			ti ⁶	te ⁶	ti ⁴	t'ɪ ¹	t'iam ¹	t'ian ¹	t'ui ¹	t'e ¹	t'i ¹
把脈花			pe ³	pa ³	pa ³	mɛŋ ⁸	ɕik ⁸	mai ⁴	ɕue ¹	ɕua ¹	xua ¹
鷄莢笠			kue ¹	ke ¹	ɕei ¹	ŋɛŋ ⁷	kiap ⁷	ɕia ¹	ɕue ⁷	ɕip ⁸	li ⁴
旧張樹			ku ⁶	kiu ⁶	ɕiu ⁴	tɪ ⁰	tioŋ ¹	tsəŋ ¹	ɕiu ⁶	su ⁶	ɕu ⁴
皮林血			p'e ²	p'i ²	p'i ²	nā ²	ɕim ²	lin ²	ɕui ⁷	ɕiat ⁷	ɕye ³
飽數逼			pa ³	pau ³	pau ³	kā ³	kan ³	kan ³	piak ⁷	pik ⁷	pi ¹
白天氣			pe ⁷	pik ⁸	pai ²	t'ɪ ¹	t'ian ¹	t'ian ¹	k'ui ⁵	k'i ⁵	ɕi ⁴
木燃騎			ɕak ⁸	ɕok ⁸	mu ⁴	ɕiā ²	ɕian ²	ɕan ²	k'ia ²	k'i ²	ɕi ²
托炭沙			t'u ⁷	t'ək ⁷	t'uo ¹	t'ŋā ⁵	t'an ⁵	t'an ⁴	sua ¹	sa ¹	ɕa ¹
船官紙			tsun ²	suan ²	ts'uan ²	kŋā ¹	kuan ¹	kuan ¹	tsua ⁸	ɕi ³	tsɪ ³
閑破						kŋā ¹	kuan ¹	kuan ¹	p'ua ⁵	p'o ⁵	p'o ⁴
京暴						kɪā ¹	kiŋ ¹	ɕiŋ ¹	pau ⁷	pək ⁷	pau ⁴
青						ɕi ¹	ɕiŋ ¹	ɕiŋ ¹			
丸						ɪ ²	uan ²	uan ²			
物						mɪ ⁷	ɕut ⁸	u ⁴			
凹梅						ā ⁷	au ¹	au ¹	m ²	mŋ ²	mei ³
膜姆						mɕ ⁷	ɕok ⁸	mo ²	m ³	ɕo ³	mu ³
美不						ŋɛŋ ⁷	kiap ⁷	ɕia ²	m ⁶	put ⁷	pu ⁴
門									mŋ ²	ɕun ²	men ²
毛									mŋ ²	mɕ ³	mau ²

注Ⅰ:語例の欄では、それぞれ「單」は単母音の欄、「重」は重母音の欄、「鼻」は鼻母音の欄に語例があること。「主」

は音節主音のことであり、重母音の下に語例が示してある。

注Ⅱ:「單母音」などとは、語例の音節主音が単母音であること。以下同。

[付表Ⅱ]

厦門語声調表

方言	例	声調		平				上				去				入			
				陰		陽		陰		陽		陰		陽		陰		陽	
		全清		次清		全濁		次濁		全清		次清		全濁		次濁		全清	
		東	通	同	農	董	統	動	弄	林	痛	洞	弄	督	禿	独	鹿		
厦	音声	tɔŋ	t'ɔŋ	tɔŋ	ɗɔŋ	tɔŋ	t'ɔŋ	tɔŋ	ɗɔŋ	tɔŋ	t'ɔŋ	tɔŋ	ɗɔŋ	tɔk	t'ɔk	tɔk	ɗɔk		
門	調値	1-44	1-44	2-24	2-24	3-53	3-53	6-22	6-22	5-21	5-21	6-22	6-22	7-32	7-32	8-4	8-4		
文	音声	ɗɔŋ	hɔŋ	hɔŋ	nɔŋ	ɗɔŋ	hɔŋ	hɔŋ	lɔŋ	ɗɔŋ	hɔŋ	ɗɔŋ	lɔŋ	ɗɔk	hɔk	ɗɔk	lɔk		
昌	調値	1-23	1-23	2-22	2-22	3-21	3-21	4-33	5-44	4-33	5-24	4-33	6-44	7-3	8-2	8-2	8-2		
永	音声	tɔŋ	t'ɔŋ	ɗɔŋ	nɔŋ	tɔŋ	t'ɔŋ	ɗɔŋ	nɔŋ	tɔŋ	t'ɔŋ	ɗɔŋ	lɔŋ	tu	t'u	du	lu		
州	調値	1-45	1-45	2-33	2-33	3-41	3-41	4-214	4-214	4-214	4-214	4-214	4-214	1-45	1-45	2-33	2-33		
蘇	音声	tɔŋ	t'ɔŋ	ɗɔŋ	nɔŋ	tɔŋ	t'ɔŋ	ɗɔŋ	lɔŋ	tɔŋ	t'ɔŋ	ɗɔŋ	lɔŋ	toʔ	t'oʔ	doʔ	loʔ		
州	調値	1-55	1-55	2-13	2-13	3-51	3-51	6-31	6-31	5-513	5-513	6-31	6-31	7-5	7-5	8-3	8-3		
北	音声	tɔŋ	t'ɔŋ	t'ɔŋ	nɔŋ	tɔŋ	t'ɔŋ	tɔŋ	nɔŋ	tɔŋ	t'ɔŋ	tɔŋ	lɔŋ	tu	t'u	tu	lu		
京	調値	1-55	1-55	2-35	2-35	3-214	3-214	4-51	4-51	4-51	4-51	4-51	4-51	1-55	1-55	2-35	4-51		

注Ⅰ:調値の欄は、前の数字は調類を示し、後の数字は調値を示す。例えば、厦門語の場合、「東」は第1声で、調値は44であり、

「独」は第8声で、調値は4である。

注Ⅱ:網掛けの欄は声調が同じ調値の語に合併されたことを示す。例えば、厦門語の場合は、「陽上」の「全濁・次濁」は「陽去」の「全濁・次濁」に合併されたことを示す。

したがって、それぞれの声調の調類は厦門語は7声、文昌語は8声、永州語は4声、蘇州語は8声、北京語は4声である。

注Ⅲ:中国語の声調の調類は、「平、上、去、入」に「陰・陽」と分類され、それぞれ「陰平」、「陽平」のように8種類になる。これらをそれぞれ第1声～第8声と言う。ただし、蘇州方言は第1声～第8声までそろっているが、厦門語の場合は「陽上」と「陽去」が合併したため、第4声の「陽上」が欠番となる。先行研究では厦門語の声調を第1声～第7声として記述しているが、本研究では「入声」を正確に示すために、第4声が欠番のまま、第1声～第8声のように示す。

注Ⅳ:「全清」とは無声の無気音(閉鎖音、破擦音)を表すが、「次清」とは無声の有気音(閉鎖音、摩擦音、破擦音)を表す。「全濁」とは有声の閉鎖音、摩擦音、破擦音を表すが、「次濁」とは有声の側面音、鼻音を表す。中国語の声調はこのような「清・濁」と密接な関係にあったが、古代の「全濁」の有声の閉鎖音や摩擦音と破擦音が無声化したため、現代では、吳方言の蘇州方言では声調と「清・濁」の関係がきちんと示されているほか、湘方言の永州方言でも、「全濁」の有声音が存在しても、声調は上記の表のとおり、北京語と同じ4声になっている。

一方、厦門語の場合はいわゆる「陽調」の「次濁」に入破音が観察されるが、文昌方言の場合は「全清」と「全濁」に入破音が観察される。ただし、厦門語の場合は、「馬[6e³](馬)」が「陰上」、「微[6ui¹](微か)」が「陰平」、「擬[gi³](擬)」が「陰上」、「女[du³](女)」が「陰上」であるように、いわゆる「陰調」にも「全清」の入破音が観察される。

注Ⅴ:一般に「陰」の「全清・次清」は同じ声調であり、「陽」の「全濁・次濁」は同じ声調であるが、歴史的な変化のため、表の文昌方言の場合のように異なる声調も観察される。